

御坊さん

『御坊さん』第20号

年刊 平成 28年 8月

発行 亀山本徳寺内・本徳寺廟所墓地管理部
姫路市亀山三三四・079-2351-0242

編集 亀山本徳寺内・真宗文化研究室

泥 洹 殿

私の部屋は物が多い。どこに何があるのか把握しているから、調べ物や作業をするのには心地良いが、湿度が高い日が続くと心地悪くなるのは必然である。物の中には過去の物、勿体ないと感じ一応はとってある物、捨てるのが邪魔くさくて取りあえず置いてある物が所狭しと積み上がっている。これら一切を総じて言えば執着である。こういった執着を綺麗さっぱり取り除き、身も心も洗い流したいと願う。思い浮かべるのは今流行の片付けブームの代名詞「断・捨・離」である。

釈迦は自ら煩惱の炎をかき消す事で、悟りを開き、『涅槃』を弟子達に知らしめた。涅槃はサンスクリット仏教用語でNirvana(ニルヴァーナ)、字義は「吹き消すこと」「その状態」である。かき消す物の正体は「煩惱の火」である。『断・捨・離』という言葉も煩惱をかき消す作業に似ている。煩惱の中で一番厄介なものが「執着」である。煩惱を断ち、煩惱を捨て、煩惱から離れるのである。釈迦はこれら一切苦の原因となつてゐるKlesha(クレーシャー)「煩惱」を把握し克服することで、如来になる。『涅槃』如来なのだ。

親鸞聖人は「涅槃」を「真解脱」と呼んだ。
『無上は真解脱、真解脱は如来なり、真解脱にいたりてぞ、無愛無疑とはあらはるる』(弥陀和讃)の意味を取ると、「無上は仏教の悟りであり、迷いからの真の解脱である。真の解脱は如来の悟りそのものであつて知的な煩惱からも感情的な煩惱からも解放された境地である」となる。続けて「涅槃」を「如来」という言葉で定義付けた。『如来すなわち涅槃なり、涅槃を仏性となづけたり・・・』

(弥陀和讃)「煩惱を断絶した真理そのものが如来であり、涅槃の本質である。涅槃は仏の本性でありそれを仏性と言う」とある。ここで「如来」＝「解脱」＝「涅槃」という構図が成り立つ。「涅槃」＝「如来」なのである。但し、続けて聖人はこう述べる。「凡地にしてはさとられず、安養にいたりて証すべし」とある。この句で涅槃は凡夫の世界では悟りうる事ができない。浄土に往生して



参拝記念証

こそ、悟る筈であると主張する。つまり「涅槃」＝「如来」の等号式は安養の世界で成り立つてあろう話なのだ。さて、本徳寺・本堂内の扁額には「泥洹殿」とある。この扁額は明治六年本山より北集会所が解体され、ここ亀山に移築された時、本願寺二十世広如上人により墨書されたものである。讃仏偈の内に「國如泥洹而無等双我当哀愍度脱一切」とある。「国(仏国土)は泥洹の如く無

双でありながら、我は慈悲をおこし、一切を救おう」正に法蔵菩薩の誓いのクライマックス部分に使われている単語である。「泥洹」はNirvana(ニルヴァーナ)の音訳、つまり「涅槃」と同義語である。誰がどうという経緯で付けたのかは分からないのだが、私には本堂内陣という空間

は我々凡夫が想像しうる中で最高の浄土の世界を表現したかったという思いが見え隠れしてならない。では、我々凡夫が思い浮かべる「浄土」とはどういう世界だろうか。源信僧都は阿弥陀仏の浄土「真実報土」とそれを手立てとする「方便化土」と区別し明らかにされた。方便化土とはいえず、その世界観は阿弥陀経に表現されている通り、莊嚴であり、きらびやかな世界である。このような世界を表現された空間の中で、我々は要門・真門なる方便の意義を見いだし、真実信心を獲得することで初めて「真実報土」の世界、「涅槃」というものを問うことができるのではないだろうか。

さて、後日談として前に述べた和讃の続きに、『無碍の仏智をうたがえば會婆羅頻陀羅地獄にて多劫衆苦にせずむなり』(弥陀和讃)とある。衆生の障碍のある不自由な智解を以て無碍自在な仏智を疑い謗れば、その報いとして、劇しい苦しみ地獄に沈んで永劫に諸々の苦をうけて浮かばれない。」と云う。

物があふれる部屋の中、この執着という煩惱の中で、「浄土」は本当にあるのだろうかと思ひ、頭を抱えている自分、そして本当に言いたいことを忘れて自分の考えを単につらつらと書いただけの自分を客観的に見つめなおすと、正に、今會婆羅頻陀羅地獄の中でもがき苦しんでいたのだなと気付く。まず部屋の片付けから始めよう。

大谷昭智

参拝記念証について

近年、世代を超えて古寺巡りが流行している。特に、檀家寺でない本徳寺へは色々な人が訪れる。本願寺への参拝のつもりで、文化財の見学であったり、最近では大河ドラマのロケ地巡りであったり、あるいは外国人が観光目的で参詣される。

その際に参拝記念として御朱印を求められる。真宗では御朱印の習慣がないからと断ってきたが、その数があまりにも多いため対応せざるを得なくなつた。

取りあえず「泥洹殿」「撰取不捨」「俱会一処」の文言を配した参拝記念証を、本堂で合掌・礼拝することを条件に渡すことにした。これを機会に仏語の意味を知ってもらう為、それぞれの文言の出拠をあきらかにして、説明を加え、味わいを掲載することにした。仏縁になれば有り難いことである。

(本徳寺事務所)